

## 児童の教育活動からみる「ネサヨ運動」と「ネハイ運動」の実態

橋本典尚

**“The “Ne”·“Sa”·“Yo” Movement (The “Ne·Sa·Yo-Undou”/1957-1966)”,  
and “The “Ne”·“Hai” Movement (The “Ne·Hai-Undou”/1961-1965)”  
from the Point of Child's Educational Activities.**

HASHIMOTO Norinao

### 【要旨】

戦後、小学校の教育活動は、様々な教育運動とともに行われてきた。その中でも、代表的なものに、1960年代、全国展開した「ネサヨ運動1957-1966」と、地域展開した「ネハイ運動1961-1965」があげられる。だが、教育活動の実態として、行われた内容については、あまり知られていない現状である。

本論は、忘れさられた「ネサヨ運動」「ネハイ運動」の調査・再考として、聞き取り調査・資料調査を行ったものである。期間としては、2001年～2007年の間に、「ネサヨ運動」「ネハイ運動」の中心地であった鎌倉市・筑穂町を中心に、全国各地で行った。

主な内容は、「ネサヨ運動」「ネハイ運動」の活動実態として、行事活動で行われた「シュプレヒコール／ネサヨ祭り／リボン週間／おはよう週間／ことばの週間／ことばのカード」などについて、取りあげた。その結果、現在にも、残る教育活動のはじまりが、コミュニケーション行動の形成に関わる教育視点とともに再考できたのである。

なお、本論は、先の論文で、教育活動を中心に取りあげられなかった視点について、まとめたものである。

### 【キーワード】

教育活動, ネサヨ運動, ネハイ運動, 調査, 臨床教育学

## I はじめに

### 1. 研究目的

戦後、コミュニケーション行動形成に関わる学校の教育活動は、様々に行われてきた。その中でも、代表的なものに、1960年代、全国展開した「ネサヨ運動」と、地域展開した「ネハイ運動」があげられる。

一般に、「ネサヨ運動」は、文字通り「元気だね」「大きいさ」「早いよ」などの語尾にくる「ね」「さ」「よ」を使わせないようにする運動とされ、また、「ネハイ運動」は、その逆であったとされる。だが、ことばの本質的な役割に気づかなかった「ネサヨ運動」「ネハイ運動」は、1960年代後半には、消えてしまったとされ、行われた教育活動については、

知られていない現状である。

本論は、「児童の教育活動」について、「ネサヨ運動」と「ネハイ運動」の記録と、今日に残る特別活動／教育活動につながる視点から、現時点で再考した実態調査について、まとめたものである。

## 2. 調査方法と再考経緯

調査方法としては、聞き取り調査・資料調査を、2001年～2007年の期間に、「ネサヨ運動」「ネハイ運動」の中心地であった鎌倉市・筑穂町の小学校などを中心に、北海道から九州の全国各地で行った。

内容としては、特別活動といわれる教育活動の内容について、関係者からの聞き取り、活動時の資料から確認がとれたものについて、主に、現在に残る教育活動を取りあげた内容である。

研究のきっかけは、橋本典尚(2001)が、「ネサヨ運動」の地元、鎌倉であったことから、田中章夫(2001)から依頼をうけて、資料調査をしたことに始まる。だが、資料調査の過程で、当時の資料が存在せず、当時の関係者ほかからの協力から、かろうじて残存していた資料と、小島寅雄(2001)ほか関係者からの聞き取り調査から再考できた経緯がある。また、1960年の同期に福岡の大分で展開された「ネハイ運動」についても、かろうじて残存していた資料と、伊佐康正(2002)ほか、関係者からの聞き取り調査から、再考できた経緯がある。

以上を踏まえ、本論では、教育活動の実態(特別活動／行事活動)を中心に、全国展開した「ネサヨ運動」と、九州地域で展開した「ネハイ運動」を、残存していた資料、及び、聞き取り調査から、現時点で再考した内容を報告する。

## Ⅱ 児童の教育活動からみる視点

### 1. 児童の教育活動に注目する視点

文部科学省(2007)は、「授業の1コマ増、総合学習は減、学習指導要領案」の枠組みを中央教育審議会の中学校部会に提示した。具体的な内容については、各教育委員会、各学校の裁量にゆだねられる教育内容になるが、教科ばかりの方向性に、少し不安を感じる。その一方で、1990年代から、若者の対人関係におけるコミュニケーションの問題対応について、教育活動の基本を「豊かな心の育成」として、すすめてきている。原因として、急激に変化する社会環境から、「人間関係の希薄化」が、指摘されている。

だが、「相手を理解する能力」「生命の大切さを認識する能力」の教育視点が求められている中、文部科学省(2006)が、「2005年度教員の現状実態」について、公表した一次調査報告は、衝撃的であったと言える。特に、指導力不足教員の現状調査2005では、40歳以上が80%を占め5000人を突破したことは、21世紀の教育現場にとって、不安と言える。子どもとだけでなく、教員の間とでも、コミュニケーションがとれないとする現状実態が、若者のモデリングにならない教育の一端を示している。一方通行でしかない「ひとりひとり」へのコミュニケーション行動が行えてこなかった結果からだろうか。

もし、世代間・同世代同士での「ふれあい」学習経験がなかった場合、個人をとらえる領域は、どのようになるのであろうか。コミュニケーション行動の形成に、生育環境が、大きく影響していることは、知られている。そういった意味で、学校施設における教育活動、青少年施設を通じての教育活動には、大きな意味があると言える。

### 2. 児童の教育活動からみる取り組み

2000年以降、「朝の読書時間」など、各地

の小学校で、教育活動が盛んに行われている。「ネサヨ運動」時に行われていた「シュプレックヒコール」の「朝の朝礼読書会」に似ている。各地に残る「お早う週間」「リボン運動」と共に、「ネサヨ運動」の遺産とも言える。

だが近年の教育活動では、思いが先走り、表面だけのマニュアル化が進み、生活に関わるコミュニケーション行動への適応性、改善効果は、あまり求められていない。そういった意味で、当時、「どの子どもも話せる教室に」をキャッチフレーズに、話し合える「ことば」のスキルについて、教育活動を行っていた意味は大きいと言える。

では、全国展開した「ネサヨ運動」地域展開した「ネハイ運動」では、どのような教育活動が行われていたのだろうか。

### Ⅲ 「ネサヨ運動」と「ネハイ運動」の先行研究と認識状況

#### 1. 「ネサヨ運動」と「ネハイ運動」の先行研究と認識状況

一般的に「ネサヨ運動」というと、日常会話で文末の「ネ・サ・ヨ」を使わないようにする運動と、はじめて取りあげた大石初太郎(1963)<sup>(5)</sup>により認識されている。大石初太郎(1963)によれば、悪い言葉の追放として「ネサヨ運動」が紹介され、主な出来事に「ネサヨの碑」「ねさよ祭り」などが取り上げられている。また、「ネハイ運動」については、一般に、ほとんど知られることもなく、大石初太郎(1963)<sup>(5)</sup>の中で、「ネサヨ運動」と正反対であったとされるだけであった。

だが、田中章夫(2002)<sup>(15)</sup>・橋本典尚(2002・2003・2004)<sup>(23)・(24)・(25)</sup>で、先に報告した通り、実際は、異なっていたのである。「ネサヨ運動」について、当時の関係者であった小島寅雄(2001)ほか、聞き取り調査・資料の再考から、「ネサヨ運動」実態は、「ネ・サ・ヨ」を禁止した教育活動ではなく、「ことば」の使い方から考えようとする創造学習として、教師・

生徒・地域取り組み、社会へ出た時の基礎教育として、教育活動であったことを明らかにした経緯がある。主な視点としては、「ことばの碑(ネサヨの碑)」を中心に、全国展開した姉妹校との関わりについて、地域の都市化とともに再考してきた。また、「ネハイ運動」についても、当時の関係者であった伊佐康正(2002)からの聞き取り調査ほかから、筑穂町は、炭坑町であり、教育を良くするには、教員の姿勢を変える必要性があった一つに、「ネハイ運動」があったとを、明らかにした経緯がある。

#### 2. 「ネサヨ運動」の概略

一般に、「ネサヨ運動」というと、1960年代に鎌倉市立腰越小学校から、全国展開した教育活動として、「～ネ～サ～ヨ」を禁止した運動とメディアを通じて、認識されてきたが、実態は不明であった。

だが、橋本典尚(2002・2003)<sup>(23)・(24)</sup>・田中章夫(2002)<sup>(15)</sup>で報告した通り、実際は、異なっていた。当時の関係者であった小島寅雄(2001)ほか、聞き取り調査・資料の再考から、「ネサヨ運動」動機・実態は、「ネ・サ・ヨ」を禁止した教育活動ではなく、「ことば」の使い方を考えようとする創造学習として、教師・生徒・地域取り組み、社会へ出た時の基礎教育として、教育活動であったことを明らかにした経緯がある。

全国展開した「ネサヨ運動」の教育目的としては、次の3つに、まとめられる。また、当時、運動の中心にいた人物としては、小島ほか4人があげられる。

なお、「ネサヨ運動」の概略については、先に橋本典尚(2002)<sup>(25)</sup>で報告しており、ここでは、「ネサヨ運動」の概略の紹介だけに、留めさせて頂く。

「ネサヨ運動」の教育目的・(1957-1966)
①語尾・フォーマル・アクセントを伸ばす発話・コミュニケーション問題改善。

- ②教師・生徒・親子間における対人意識・社会への基礎教育と創造学習の視点。
- ③背景に首都圏の住民と地元住民との交流からことばへの意識差異。

1960年代全国展開した運動の中心  
／林邦雄・片瀬孝之助・小島寅雄・井上定／

すなわち、「ネサヨ運動」とは、単に文末の「ネ・サ・ヨ」を禁止した運動でなく、首都圏ことばのに対して、語尾・アクセントの問題意識、ことばからの対人関係における問題意識、そして、教育として、教員側にある意識変化が必要と提起、問題を指摘したかったねらいがあったといえる。

その意味では、「ネサヨ運動」のチェーン校として、一時、100校を越えるが、最後まで提携した84校とは、実態をつかんだ交流が行われたといえる。

なお、チェーン校とは、相互に連鎖していく姉妹校の意味合いがあったそうである。

### 3. 「ネハイ運動」の概略

「ネハイ運動」については、一般に、ほとんど知られることもなく、大石初太郎(1963)<sup>(5)</sup>の中で、「ネサヨ運動」と正反対であったとされるだけで、1960年代、九州の筑穂町立大分小学校で展開したとされるだけであった。だが、実際は、橋本典尚(2002・2003・2004)<sup>(23)・(24)・(25)</sup>で報告した通り、少し異なっていた。当時、筑穂町は、炭坑町であり、教育を良くするには、教員の姿勢を変える必要性があった一つに、「ネハイ運動」があったとを、関係者であった伊佐康正(2002)からの聞き取り調査ほか、関係者からの協力から、実態を把握してきた経緯がある。

地域展開した「ネハイ運動」の教育目的としては、次の3つに、まとめられる。また、当時、運動の中心にいた人物としては、伊佐ほか3人があげられる。

なお、「ネハイ運動」の概略については、

先に橋本典尚(2003)<sup>(24)</sup>で報告しており、ここでは、「ネハイ運動」の概略の紹介だけに、留めさせて頂く。

「ネハイ運動」の教育目的・(1961-1965)

- ①語尾の方言・アクセントに気を付けるコミュニケーション問題の改善。
- ②教師・生徒・親子間における対人意識・都市社会へ適応するための基礎教育。
- ③背景に炭坑町としての、地域改善をしたい住民意識の運動一環。

1960年代地域展開した運動の中心  
／佐藤勝・森本正紀・伊佐康正／

## IV 児童の教育活動からみるネサヨ運動とネハイ運動

### 1. 現在でも続く「ネサヨ運動」姉妹校からの教育活動

全国展開した教育運動／教育活動であったが、「ネサヨ運動・ネハイ運動」は、キャッチフレーズの言葉に、影響されて、実際に行われた教育活動は、ほとんど注目も再考されることもなかったと言える。

では、児童の教育活動からみた「ネサヨ運動」と「ネハイ運動」には、どのような教育活動があったのだろうか。調査再考でとらえることができた代表的な教育活動を見ていくことにする。代表的な姉妹校(チェーン校)との教育活動を見てみると、「ネ・サ・ヨ運動のスタンプ」「シュプレッヒコールで、ことばを考えよう」「ことばの船出」「ネサヨ祭り」「リボン運動」「ことばの週間」などが挙げられ、今でも、行われている特別活動の一端が見えてくる。

なお、姉妹校と、その後については、今後とも、報告したく考えている。

### 2. ネサヨ運動の行事活動から

「ネサヨ運動」の行事には、「ねさよ祭り」「ことばの船出(1月4日に大漁旗と共にネサヨ旗を掲げる)」「ことばの病院(聞いていて嫌なことば・悪い言葉耳にした場合、各自で注



意して、月に30枚のカードに記録して行き、ネサヨ祭り(で焼く)活動などがあつた。いずれも、対人関係における「ことばの意識」を軸に置いたものであつたといえる。

### 3. ネサヨ運動の姉妹校(チェーン校)との交流

教育活動の当初から、手紙を身近な人に送ろうとする教育活動の取り組みは、行われていたようである。「ネサヨ運動」は、教育研究活動と共に、メディアに報道されたのをきっかけに、姉妹校との交流から、チェーン校(姉妹校)が生まれたとも言える。1960年、「ネサヨ運動」の本格始動と共に、「ことばの年賀状」発送に合わせて、「ネ・サ・ヨ運動」のスタンプが作成される。出会いのきっかけになればと、ハガキ・スタンプを設置し、「両親・友達へ、あいさつをしよう」という教育活動が、行われた。これは、現在でも、教科教材の一端に残っている。

### 4. シュプレッヒコールで、ことばを考えよう

人と話すきっかけを見つける一方、生徒側の「人と話せない」親側の「子供と話せない」とする悩みも多く指摘されていた。そこで、各学年ごとに、実態調査と教育活動への取り組みを行おうと、気軽に「おはなししましょう」をキャッチフレーズに、行われた教育活動である。また、各学年、コミュニケーション行動の改善をすすめると共に、学校全体での活動として、「月曜日・朝礼でことばのキャッチボール」「木曜日・朝礼で行う作文朗読」が行われた。

例えば、小学校1年生では、「言いたいことも云えない子供」をテーマに家庭と連携して、生徒・教員・地域関係・語彙について考察していた記録が伺える。

また、全学年で「仲間に入れられない子供の毎日」について、教員同士の間で、また、児童

の生徒間で、観察し「どうしたらバックアップできるか、どうしたら相手を理解できるか」、生活環境から、考えようとしていた教育活動は、大きな意味合いを持っていたと言える。特に、今日では、プライバシーの問題等から、むずかしい事柄だが、次の4点「勉強の様子／遊びの様子／ことばの様子／家庭の様子」から、各自で様子をみていた記録も伺える。

\*

#### －ことばの样子の例1

- 1 / 声が小さい
- 2 / ～でね。～したの。という話し方なのでテンポがあわない
- 3 / 話しかけてもポツンとした答え方しかできない

#### －ことばの样子の例2

- 1 / ～するぞ。とすぐ使う
- 2 / しゃべりたいことは、相手も場所かまわず大声ではなす

\*

### 5. ネサヨ祭り／ネサヨ雪祭り／ネサヨ夏祭り

「ネサヨ運動」を有名にした教育活動のひとつに、「ネサヨ祭り」がある。全国各地で同様に行われた行事であるが、一般には「どんど焼き」と「正月に行う漁船祝い」のようなイメージが強いようである。実際は、どのようなイメージが強いのだろうか。腰越小学校で行われた第3回ネサヨ祭り(1961)のプログラムをみると、各学年ごとの発表からフォークダンスなど、文化祭のように地域活動として、多様な行事であったことが伺える。「7・ネサヨ祭り：点火」にある点火とは、児童がそれぞれにメモした「ことばのカード」を、「どんど焼き」のように燃やしたものであり、一般に言われるイメージは、ここから来たようである。

なお、腰越小学校で「ネサヨ祭り」は、

1966年まで長期に行われ、教育活動の中心にあったことが伺える。

また、姉妹校のひとつ、北海道の中央に位置する永山東小学校では、「ネサヨ雪祭り」が行われたことは、知られている。「ネサヨ運動」に参加した初期、冬に行う教育活動・学校行事は、すでに存在していた為、当初は、「ネサヨ夏祭り」として、はじめた経緯があったようである。

なお、姉妹校として、永山東小学校は、1966年に、「ネサヨ運動」に参加した経緯、「ネサヨ夏祭り・ネサヨ雪祭り」など、地域教育活動への取り組みが、評価されて、(株)学研から「学研教育賞」を受賞している。

\*

- 9:30 第1部 こしごえの朝(校庭)
- 1・あいさつのうた
  - 2・校長先生のお話
  - 3・コーラススピーキング
  - 4・口の体操
  - 5・委員の報告
  - 6・青空劇場
  - 7・ネサヨ祭り：フォークダンス：点火
- 11:30 第2部 映画上映「ネサヨ人形」
- 12:00 昼食
- 12:40 第3部 しごとの報告：質疑／講演：柴田武
- 15:30 おわりに／中野三二・小島寅雄・小島達吉
- 第3回「ネサヨ祭り」のプログラム  
(1961, 12) から

\*

## 6. ことばの船出

腰越は漁村であったこともあって、正月には、大漁旗を挙げていた。それに合わせて、地域住民からの提案で、腰越小学校でも、「ネサヨ運動」の旗を挙げようとした教育活動が、「ことばの船出」である。使用した旗は、かなりの大きさで、「ネサヨ」の旗を船に掲げて、

腰越港を廻ったそうである。

## 7. おはよう週間

「ネサヨ運動」の姉妹校から始まった代表的な教育活動のひとつに、「お早う運動／おはよう週間」がある。特に、「友だちと話すきっかけを作ろう」ということから、1961年に、大阪の諏訪小学校を中心に始まった「お早う運動」は、メディアでも取り上げられ、現在でも各地の小学校に残る「朝の挨拶週間」のきっかけを作ったといえる。

## 8. リボン週間／リボン運動

「リボン運動」とは、現在でも、「おはよう週間」と共に、各地で続く「リボン週間」の基である。特に、クラスの生徒同士が相互に協調性を持てるようにした教育活動と言える。活動としては、クラスごとに毎日、「帰りの会」に、一人一人について、日常の相手への話し方など報告しあい、生徒同士が相互に推薦しあって、賛成を得られたら、リボンを送るというものである。リボンは、「交通安全週間」と重なっていたことから、「黄色いリボン」になったようである。この後、教員側だけでなく、生徒側にも、「ことばの委員」が選出され、姉妹校との交流活動に、積極的に関わって行った経緯がある。

橋本典尚(2001)も、小学校2年生の頃、クラスのみんなから、リボンをもらい、上級生に左肩の洋服に、ピンで止めてもらって、うれしかったことを、今でもおぼえている。鎌倉市内でも1980年頃まで、活動を行っていた記憶がある。

## 9. ことばの週間

「ことばの週間」とは、「リボン運動」が地域・姉妹校でも好評であったことから、引き続きクラス別・学年別に、行われた教育活動である。全体として、クラス内の班行動を主として、学年間の交流も行ったようである。

後の「リボン週間」などで、行われる小1～6年までを通じて行う縦割班活動は、ここから、来ているようである。

例えば、あるクラスの週間お知らせをみると、授業科目では、学ばない日常生活に関わる病気のことについて、「知る機会」と、「考える場」を作っていたことが伺える。

なお、姉妹校として、明神小学校は、1961年、「ネサヨ運動」に参加した経緯など、教育活動が評価され、読売新聞社から「読売教育賞」を受賞している。

\*

- 10月 ことばの週間実施目標 5年生  
 水 4 はなしのききかた  
 木 5 どんな病気があるだろうか  
 金 6 へんじとあいさつ  
 土 7 むだとていねいについて先生から話しをきく  
 日 8 へんじとあいさつ  
 月 9 大きい声小さい声に気をつけよう  
 火 10 思ったことをいおう  
 クラスの週間お知らせ (1963. 10) から

\*

## 10. ことばのカード

ことばのカードは、「ネサヨ運動」でも行われたが、「ネハイ運動」では、月に30枚の「ことばのカード」を生徒と教員一人一人に配布して、聞いていて嫌なことばを耳にした場合、話した相手のカードに記入して、各自で日常生活から、「ことば」に気を付けて行く教育活動の取り組みである。いずれも、対人関係における「ことばの意識」を軸に置いたものであったといえる。

なお、「ネサヨ運動」の取り組みにも「ことばの病院」で「ことばのカード」があったが、こちらは、「ネサヨ祭り」で記録したカードを焼いていた点では、類似している。

## 11. ○○ですネ・ハイ／○○さん○○くん

呼称を使い相手への丁寧な対応から、教育意識について、考えたものに「ネハイ運動」の「美しいことばの運動」、「○○ですネ・ハイ」「○○さん○○くん」があげられる。また、関連して、この「ネハイ運動」の大きな副産物には、「ネ・ハイ」と応答、呼び名の通り、教員側の教育意識を改善し、教員同士、児童・生徒に対しても、むやみに怒ったりしなくなった効果があったと知られている。特に、児童・生徒に対して、呼び捨てにしないで、「○○さん、○○くん」と、呼び合うことにより、相互に信頼あえるよう丁寧に呼ぼうとした出発点となり、特に、教員側に大きな影響を与えたとも言える。

## V むすび

本論を通じて、調査再考できた事柄は、忘れられた教育活動の一つといえる。特に、「ネサヨ運動・ネハイ運動」で見えたものには、「ことばのしごと、実は教育・人を求めて。」であったと言える。単に、「ネサヨ運動・ネハイ運動」と言って、「ことば」を捉えるだけでなく、その裏側にあった現在にも通じる対人意識（伝え逢う教育活動）にこそ、必要性があると感じる。

「ことばの碑」にある「ことばから出発して、なかまづくりをめざす、というしごと」は、教育活動として、本来もとめられる学校教育の基礎である。

現在でも、各地に残る児童の教育活動は、「お早う週間」「リボン週間」と共に、「ネサヨ運動」「ネハイ運動」の遺産とも言え、「ネサヨ運動」「ネハイ運動」の教育活動の意味合いは、現在、再考すべき教育姿勢と考える。

今後とも、教育活動を、調査再考から記録して、活用出来たらと願っている。

謝辞・本稿にあたって、調査を行う機会を頂き

「ネサヨ運動・ネハイ運動」資料調査・聞き取り調査にご協力頂きました伊佐康正・岡田厚・片峯昌世・門井富士夫・金子俊明・小島寅雄(2002年逝去)・小林重雄・齋藤美代子・佐藤敦子・田中章夫・辻正晴・根上剛士・西原瑞・橋本忠明・福島わかば・堀込静香(2003年逝去)・正平高志・松井恵美子・宮嶋将嗣ほか, 関係者みなさまに活用できたことを報告すると共に, 感謝を申し上げます。(敬称省略)

**引用参考された文献:** 本調査, 橋本典尚(2001~2005)「ネサヨ運動」「ネハイ運動」再考については, 後藤理(2004)「なんしょ北九州[NHK北九州放送局]」ほかで, 取材・取り上げられる機会に恵まれ, また, Emi Morita(2003)「Ph.D, Association with speech style[UCLA:アメリカ]」, 田中章夫(2005)「国際シンポジウム[台湾]」にて, 紹介して頂く機会などに恵まれた。

#### 調査資料／調査時期

2001年5月~2007年7月現在・「ネサヨ運動・ネハイ運動」調査と資料収集の再考から。

2001年7月・11月・小島寅雄(関係者)氏ほかへの「ネサヨ運動」聞き取り調査から。

2002年7月・12月・伊佐康正(関係者)氏ほかへの「ネハイ運動」聞き取り調査から。

#### 参考文献

- (1) NHK北九州放送局, 「なんしょ北九州」, <http://nhk.or.jp/kitakyushu/tv/nanshon.html>(-2006), 2004
- (2) NHK気になることば, 「6月22日ネサヨ運動」, <http://www.nhk.or.jp/a-room/kininaru/>(-2007), 2004
- (3) NHK気になることば, 「6月23日ネハイ運動」, <http://www.nhk.or.jp/a-room/kininaru/>(-2007), 2004
- (4) NHKふるさと日本のことば, 「10月22日神奈川県」, <http://www.nhk.or.jp/kotoba/27kanagawa/>(-2007), 2000
- (5) 大石初太郎, 「悪いことば, 良いことば」, 言語生活, 第140号, 1963, pp35-41
- (6) 鎌倉市立教育研究所編集, 「続鎌倉市教育史」, 鎌倉市教育研究所, 1992
- (7) 鎌倉市立教育研究所編集, 「鎌倉市教育史」, 鎌倉市教育研究所, 1974
- (8) 鎌倉市立腰越小学校創立百周年記念編集委員会, 「創立百周年記念誌」, 1972
- (9) 鎌倉市立腰越小学校研究会, 「集団のなかで生きたことばを育てる」, 1963
- (10) 鎌倉市立腰越小学校研究会, 「国語学習とくらしのことば」, 1958
- (11) 小島寅雄, 「子供と生きて／綴り方と教師の記録」, 第1版, 創造社, 1970
- (12) 後藤理, 「NHKネハイ運動VTR」, 6月23日・福岡版, 取材協力関係者配布資料, 2004
- (13) 田中章夫, 「近代のコトバのキャンペーン」, 対照言語行動研究会, 2006, pp1-9
- (14) 田中章夫, 「ことばのユレ」, 日語教学国際会議, 2005
- (15) 田中章夫, 「ことば論議にみる位相差の諸相」, 国語論究, 第9集, 第1版, 明治書院, 2002, pp11-32
- (16) 田中章夫, 「テヨダワ言葉からネサヨ運動まで」, 図書, 1月号, 1988, pp10-16
- (17) 筑穂町, <http://www.town.chikuhou.lg.jp>(-2006.3), 2002
- (18) 根上剛士, 「芦田恵之助の戦後における一足跡」, 埼玉大学紀要教育学部, 第28集, 1978, pp1-5
- (19) 橋本典尚, 「若者の呼称にみる自己領域と対人関係」, 白山社会学研究, 第14号, 2007, pp62-73
- (20) 橋本典尚, 「ことばからのコミュニケーション活動と教育視点」, 東洋大学大学院紀要, 第43集, 2007, pp262-246
- (21) 橋本典尚, 「ことばからの臨床分析とコミュニケーション行動」, 東洋大学大学院紀要, 第42集, 2006, pp276-261
- (22) 橋本典尚, 「「ことば」の教育活動と臨床視点」, 東洋大学大学院紀要, 第41集, 2005, pp297-312
- (23) 橋本典尚, 「「ネサヨ運動」と「ネハイ運動」」, 東洋大学大学院紀要, 第40集, 2004, pp250-237
- (24) 橋本典尚, 「「ネサヨ運動」とその周辺」, 東洋大学大学院紀要, 第39集, 2003,



pp250-237

- (25) 橋本典尚, 「「ネサヨ運動」とその周辺」,  
社会言語学会予稿集, 第9集, 2002,  
pp15-20
- (26) 文部科学省, 「初等中等教育の充実」, 文部  
科学時報, 4月号, 2006.4, pp20-24